

曰佐集団と秦氏

鷺 森 浩 幸

はじめに

曰佐（をさ）は外国語の通訳の職掌が姓となったものである。たとえば、『日本書紀』推古一六（六〇八）年九月一日条には奈羅訳語恵明が、持統九（六九五）年閏二月二三日条には下訳語諸田が見えるが、それぞれほかの史料に散見される檀曰佐氏・下曰佐氏である。また、敏達天皇の都は『日本書紀』では「訳語田」の幸玉宮であったが、『古事記』では「他田宮」であり、訳語田を「をさだ」と訓ずることはまちがいない。なぜ、通訳のことを「をさ」と称するのかについてさまざまな議論があるようであるが、詳しいことは不明である。

また、正倉院文書にもいく人かの曰佐がみえ、重要な

情報を与えてくれる。調曰佐足麻呂はこの表記（造東大寺司上日帳 日付欠 一五―一三三）^①のほか、天平勝宝二（七五〇）年八月二八日造東大寺司解案（丹裏文書 二五―一三三）には調行足麻呂とあり、調足麻呂解（日付欠 二五―一三〇二）は本人の書いた文書であるが、ここでは調足麻呂とある。前二者が姓としての「をさ」を表記したケース、後者が省略したケースであるから、「行」は「曰佐」であることになる。同様に、調曰佐咥麻呂や錦部曰佐大魚も調行、錦部行と表記された事例がある。^②曰佐はもうひとつ「行」との表記があったことになる。大漢和辞典によると、行（行人）とは賓客を掌る官であり、その意味・用法に由来して、「をさ」を「行」と表記するようになったのであろう。後に調曰佐足麻呂・咥

麻呂・錦部曰佐大魚の活動に触れることがあるが、ここでは表記を確認しておきたい。なお、本稿では、特に必要のない限り、曰佐と表記する。

さて、曰佐が通訳であったことは疑いないが、その詳細なあり方や歴史的な位置づけはまだ未解明であるといえる。曰佐について、研究は決して多くはなく、おおむね異言語の接触の問題として論じられ、より詳細な検討は太田亮や佐伯有清の氏族や氏姓に関する包括的な研究のなかで行われたものがあるにすぎない⁽³⁾。本稿は、通訳の集団としての曰佐の構成や居住地など、氏族研究としての基本的な事項を考察するものである。

一 曰佐および己知

まず、通訳を職掌とする曰佐集団は渡来人であったと考えられるが、その出自などについて考察し、存在形態を明らかにしたい。

『新撰姓氏録』において曰佐を称する氏族は表Ⅰの通りである。(3)に関して、末使主は同じく山城国諸蕃百済に「出^レ自^二百济国人津留牙使主^一也」⁽⁵⁾に関して、水

海連は同じく河内国諸蕃百済に「出^レ自^二百济国人努理使主^一也」とある。

まず、(1)に注目する必要がある。当該の曰佐氏はいわゆる武内宿祢後裔氏族のひとつとされるが、欽明天皇期に同族や国民を率いて渡来したとあり、不整合がある。太田亮は珍勲臣や同族四人を武内宿祢の後裔、国民を渡来人として、この説話を理解するが、佐伯有

表Ⅰ 『新撰姓氏録』にみえる曰佐

	国と類別	氏 名	出 自
1	山城国皇別	曰佐	紀朝臣同祖。武内宿祢之後也。欽明天皇御世 率同族四人 国民卅五人帰化。天皇矜其遠来 勅珍勲臣 為卅九人之訳。時人号曰訳氏。男諸石臣 次麻奈臣。是近江国野洲郡曰佐。山代国相楽郡山村曰佐 大和国添上郡曰佐等祖也。
2	大和国皇別	曰佐	紀朝臣同祖。武内宿祢之後也。
3	山城国諸蕃百济	木曰佐	末使主同祖。津留牙使主之後也。
4	河内国諸蕃漢	下曰佐	出自漢高祖男斉悼恵王肥之後也。
5	河内国諸蕃百济	調曰佐	水海連同祖。
6	河内国諸蕃百济	上曰佐	出自百济国人久爾能古使主也。

清の指摘するように、彼らは実は渡来人で、後次的に武内宿祢後裔氏族に組み入れられたと考えるべきであろう。もとの居住地に関する記載はないが、(2)～(5)において百済からの渡来人が多いことを考慮すると、(1)の曰佐もやはり百済をもともの居住地としたのではないかと、一応考えることができる。

『日本書紀』欽明元(五四〇)年二月条に「百済人己知部投化。置^二倭国添上郡山村^一」。今山村己知部之先也」と、百済人の渡来の記事がある。彼らは倭国添上郡の山村に置かれ山村己知部と称した。太田亮はこの記事を上記の『新撰姓氏録』の(1)と結びつけて、己知と曰佐はもとは一体の者であったとする。また、その後の研究でも、同じく檜・山村の地名を冠することもあって、両者はおそらく意識的に区別されることなく論じられてきた。堀池春峰は曰佐および己知を『日本書紀』欽明二六年五月条(後掲)と結びつけて、高句麗系の渡来人と推測したが、これに対して、白井伊佐牟が批判を加え、百済系の渡来人としたが、曰佐と己知は区別されていない。また、大和国添上郡の郡司を詳細に検討した藤井美沙子⁽⁷⁾

の研究でも、両者は同一の存在として論じられた。

この曰佐・己知同一説はいかがであらうか。(1)にも山代国相楽郡の山村曰佐とあり、居住地は異なるが、「山村」の地名は共通する。しかし、ここでは己知部とされる点は問題である。

なぜならば、『新撰姓氏録』には山村己知部に該当すると思われる氏族が(1)とは別に存在するからである。次の通りである。

大和国諸蕃漢 己智 出^レ自^二秦太子胡亥^一也。

大和国諸蕃漢 三林公 己智同祖。諸菰王之後也。

大和国諸蕃漢 長岡忌寸 己智同祖。諸菰王之後也。

大和国諸蕃漢 山村忌寸 己智同祖。古礼公之後也。

大和国諸蕃漢 桜田連 己智同祖。諸菰王之後也。

宝龜八(七七七)年七月一日に檜曰佐河内らが長岡忌寸、山村許智大足らが山村忌寸と賜姓されており(『続日本紀』同日条)、長岡忌寸、山村忌寸氏はもとは檜曰佐、山村許智氏であった。そして、彼らは秦の皇帝の後裔と称する氏族群であり、明らかに上記の百済人とおぼしき曰佐氏とは別の存在である。

さて、已知（己智・許知・許智など表記はさまざま）

にはすでに先学の研究がある。⁽⁸⁾ 已知の語は新羅人の名の末尾に付す尊称であり、已知の氏族群は秦氏と同じく秦の始皇帝を始祖とし、秦氏の同族であったとされる。秦氏が新羅系の渡来氏族であることはほぼ共通認識といつてよく、したがって、上記の己智の氏族群は新羅系の渡来氏族であったことになり、百済人ではない。已知が新羅人の尊称であったとするならば、それが百済系の渡来人につくのは不自然であり、『日本書紀』の記事には何らかの錯誤があるのではないかと推測される。この記事は端的に、百済系の山村曰佐を誤って山村已知と記したのではなからうか。⁽⁹⁾ (1)では、渡来人の後裔が近江国野洲郡・山代国相楽郡・大和国添上郡の曰佐となったとされるが、山代国相楽郡の山村曰佐とされるのはやや問題が残るであろう。山村曰佐はここにも居住したのであるが、その名は、後述するように、やはり大和国添上郡の山村に由来するであろう。したがって、大和国の山村にはおそらく百済人の山村曰佐と新羅人の山村已知の両者が居住したのであった。これが『日本書紀』の錯誤の背後にあつ

たものであったと考えられる。

『日本書紀』の山村已知部の渡来記事が百済系の曰佐集団の渡来を誤ったものであったとしても、新羅系の山村已知氏が存在したことは山村忌寸の实在から否定されない。つまり、曰佐と已知は別の実体であり、同一の存在ではなかったのである。同じく山村の地名を共有する百済系の曰佐の氏族と新羅系の已知の氏族が併存したのである。

さらにもうひとつの錯綜した事情があつたと思われる。それは檀曰佐氏が長岡忌寸を賜姓された点である。長岡忌寸は上述のように、新羅系の氏族とされるが、もとは已知ではなく、曰佐であった。つまり、上記の已知の氏族群にはもともと曰佐を名乗る氏族も含まれていたのであり、新羅系の曰佐も存在したのである。山村已知もおそらく山村曰佐とも呼ばれたであろう。また、檀曰佐氏では、奈羅訳語恵明など、幾人かの人物が知られるが、すべてが新羅系の渡来氏族であつたとは考えにくい。檀は大和国添上郡檀中郷であつたと考えられるが、(1)には大和国添上郡の曰佐とある。これが山村曰佐および檀

日佐をさす可能性があり、同じく檣日佐にも、百済系・新羅系の二系統があつた可能性が強い。日佐は通訳の職掌に基づく称号であり、いっぽう、已知は人名に付す尊称であつた。この点を考慮すると、日佐集団の、特に新羅系の氏族群が已知の尊称を付して呼ばれたことは不審ではない。同じく、名に日佐をもつ集団のなかで、新羅系の氏族群のみ已知の尊称を付して称されたと理解すべきであらう。

以上のように、複雑な考証になつてしまつたが、『日本書紀』の記事は『新撰姓氏録』の(1)を裏付けるものであり、山村日佐氏の渡来を示し、山村に百済系の日佐集団が存在したことの根拠となるものである。

さらに、『日本書紀』欽明二六年五月条には「高麗人頭霧喇耶陞等投^二化於筑紫^一。置^二山背国^一」。今畝原・奈羅・山村高麗人之先祖也」とあることにも注目したい。高麗人が筑紫に渡来し、山背国に置かれたのであるが、それは畝原・奈羅・山村の高麗人の祖と位置づけられる。畝原・奈羅・山村は山背国の地名と解釈するの自然かもしれないが、高麗人を山背国に置いたが、それがさらに

移住などして、現在の畝原・奈羅・山村の高麗人となつたと、山背国と切り離して解釈することも可能である。畝原は不明であるが、奈羅・山村はやはり、ここまで述べてきた大倭国添上郡の地名を想起させる。山背国には久世郡那羅郷がある（八幡市上奈良・下奈良）。前述のように、『新撰姓氏録』に相楽郡の山村日佐の記述もあるが、山村は必ずしも山背国の地名ではないと思われる。奈羅・山村とは大和国の可能性を考えておきたい。そして、ここでは日佐（通訳）であるとはされないが、奈良・山村に居住したことは重要であらう。彼らもやはり日佐集団であつたと理解していいのではなからうか。¹⁰⁾

大倭国の檣・山村には日佐集団が存在したが、それは出自により三系統に分類することができる。すなわち、百済系・新羅系・高句麗系である。もう一度、要約しておく。百済系の日佐集団は『新撰姓氏録』山城国皇別日佐にみえるもので、武内宿祢後裔氏族とされるが、それは後次的な出自伝承で、本来は百済人であつたと思われる。『日本書紀』欽明元年二月条はその渡来に関する記事である。木・上・下・調日佐もおそらく近い関係にあつ

た。新羅系の曰佐集団は『新撰姓氏録』大和国諸蕃漢己智とその同族であり、特に新羅の尊称である己智を付され、奈良時代後半には長岡忌寸・山村忌寸となった。高句麗系の曰佐集団は『日本書紀』欽明二六年五月条に見えるものであるが、明確に曰佐であったとする史料は存在しない。

さて、曰佐集団にこのような三系統が存在することの理由は、朝鮮半島の三国との密接な関係のなかで、通訳の職務が重要であったことにほかならない。曰佐集団は特定の場所に集住し、同じ氏の名（檜曰佐・山村曰佐）をもっていたと推測するが、決して、単一の集団ではなく、出自を異にする三つの集団からなり、相手国ごとに担当者が異なっていたと思われる。これは百済・新羅・高句麗がそれぞれ異なる言語を用いたことを示すが、比較的整った通訳のシステムが存在したといえよう。

二 大和国添上郡の曰佐集団

前節において、主に大和国添上郡の檜・山村の曰佐集団を論じた。ここではそれも含めて、居住地に着目して

改めて論じておきたい。

大和国添上郡に山村郷・檜中郷がある。山村郷は現奈良市山町付近に、檜中郷は現天理市檜町付近に比定され、この点について問題はない^①。檜町には檜神社があり、また、近接する天理市檜本町には長寺跡がある。現在は高良神社があり、境内に薬師堂が残る。延久二（一〇七〇）年の興福寺雑役免帳には檜本荘の内部に「長寺」の地名が存在し、起源はこれ以前にさかのぼることが可能である。白鳳期の古瓦が出土した^②。長寺の存在は檜中郷に曰佐集団が居住したこととよく合致する。

山村曰佐氏は前述した『新撰姓氏録』の記載のほかに史料上にみえる。また、山村已知氏もいくつかの史料にみえるが、山村郷での居住は確認できない。檜曰佐・檜已知氏もいくつかの史料にみえるが、檜中郷の居住は確認できない。以下の史料に注目したい（必要な部分のみ掲出）

(1) 天平一四（七四二）年十一月一日中臣寺三綱解

（八一―一三五）

淡海少広

右 大養徳国添上郡仲戸郷於美里戸主奈良許知伊加
都戸口淡海少広

(2) 貢進仕丁歴名帳(丹裏文書 二五一九三)

仕已知豊国年冊七 大倭国添上郡山村郷戸主仕已知虫麻呂戸口

八島白麻呂年十六 大倭国添上郡資母郷戸主八島麻呂戸口

(略)

「淡海人足年十九 大倭国添上郡榑中郷戸主大初位上已知伊香

豆戸口」

(1)によると、添上郡仲戸郷に榑已知氏が居住したことが確認できる。(2)によると、山村郷・榑中郷に仕已知・已知氏が居住したことが確認できる。この二氏について判明することはほとんどないが、山村已知・榑已知氏の同族であったことは推定可能である。

『和名抄』において、添上郡は山村郷・榑中郷・山辺郷・楊生郷・八島郷・大岡郷・春日郷・大宅郷の八郷からなる。このうち、(2)から山村・榑中郷は奈良時代にさかのぼることが確認できる。しかし、奈良時代の史料にはこの八郷以外の郷名が登場する。

まず、(1)(2)の二史料に仲戸郷と資母郷がみえる。なお、

(2)には山村・榑中および資母郷があり、これらが併存したことがわかる。このほかに以下の事例がある。

(3) 天平一三年閏三月七日右京職移(東南院三一六三二

(三)¹³)

大養徳国添上郡志茂郷少初位下大宅朝臣賀是麻呂

(4) 天平一三年六月二六日山背国移(東南院三一六三二

(二))

彼部添上郡師毛里戸主少初位下大宅朝臣加是麻呂

(5) 『日本霊異記』上一〇話

大和国添上郡山村中里

(6) 寛和三(九八七)年二月一三日大和国大岡中郷刀祢

等解(『平安遺文』三三二六号)

大和国添上郡大岡中郷

(2)の資母郷と(3)(4)の大宅朝臣可是麻呂の本貫であった志茂(師毛)郷は同じであろう。榑中郷には中の文字が含まれるが、(5)(6)から山村郷・大岡郷も山村中・大岡中と称されることがあったことがわかる。

さて、(1)はこれらと同時代の史料であるが、別文書であり、ここには仲戸郷がある。問題は(1)の仲戸郷と中の

文字を含む三郷との関係であるが、これらを前後関係でとらえることは妥当であろう。(1)の仲戸郷の戸主奈良許知伊加都と(2)の榑中郷の戸主已知伊香豆は同一人物と考えられるので、伊加都の移住を想定しない限り、仲戸郷は榑中郷と同じであることになる。山村・大岡の中の文字も仲戸郷に由来すると考え、この三郷はもともと仲戸郷であり、そこから分立したとみることは可能であろう。(1)は仲戸郷の名を残し、榑中郷とある(2)は分立後の状況を示すであろう。山村中・大岡中郷とある(5)(6)は平安時代のものである。『和名抄』では榑中郷には中の文字が残り、山村・大岡郷にはないが、それ以前には、山村中・大岡中のような呼称が使用されたことがあったのであるう。

仲戸郷と対になるかたちで資母(志茂・師毛)郷が存在したと思われるが、次の史料を見ると、それが大宅郷となったらしいことがわかる。

(7)天平勝宝元(七四九)年十一月三日大宅朝臣可是麻

呂解(東南院三一六三三号)

大倭国添上郡大宅郷戸主大宅朝臣可是麻呂

(8)天平勝宝二年五月一七日大宅可是麻呂解(東南院三一六三八(一))

大倭国添上郡大宅郷戸主大宅朝臣可是麻呂

大宅可是麻呂の居住地に変化がなかったとすると、天平一四年から天平勝宝元年までの間に志茂郷が大宅郷に改称されたことなるう。ただし、(2)には山村・榑中郷と資母郷があり、資母郷の改称は仲戸郷の分割にやや遅れたようである。二つの現象は仲(戸)・資母のような対になる郷名から山村・榑中・大岡・大宅のような個別的名になった点において共通し、このような郷の再編が行われた可能性はきわめて強いであろう。¹⁴⁾

和田萃¹⁵⁾を始め、大岡郷の所在地を大岡(現奈良市広岡町)に求めるのが通説であるが、ここまでの私見に基づくくと、山村・榑に近接しないので問題が残る。『大日本地名辞書』は櫛本村にあて、和珥が分れて大岡・山村の二郷となったと推定する。その根拠は不明であるが、こちらの可能性があるかもしれない。山村や榑の付近の東方の丘陵が大岡と呼ばれたのではないかと思われる。また、新羅系の榑曰佐氏は長岡忌寸を賜姓されたが、この

長岡もやはり同じ地域の丘陵を意味するのではないかと
思われる。⁽¹⁶⁾

岡曰佐大津は大和国添上郡人であるが（天平神護元
（七六五）年二月造東大寺司移案 一七一五）、大和国添
上郡において岡とつながる地名は大岡郷がもつとも蓋然
性が高いと思われる。岡曰佐氏はここに居住した曰佐集
団であつたと思われる。したがって、大岡郷もやはり曰
佐集団の居住地であつた。岡曰佐氏は『新撰姓氏録』に
は記載がなく、出自は不明である。また、岡を氏名に含
む己知も見いだすことができない。

以上のように、大倭国では曰佐集団は添上郡山村・楢
中・大岡郷に集住したことが判明する。

三 山城・近江国および北陸の曰佐集団

山背国では、いくつかの居住地が確認できる。

まず、山背国葛野郡である。天平一四（七四二）年
一二月一三日高橋虫麻呂優婆塞貢進解（八一五四）に
は山背国葛野郡橋頭郷の戸主秦調曰佐堅万呂および戸口
酒人の名が見える。橋頭郷の所在地は正確には不明であ

るが、葛野川（現大堰川）沿いの地域であることはまち
がいない。正倉院文書に名を残す調曰佐足麻呂も秦調曰
佐氏の一族と考えてまちがいないであろう。足麻呂は本
貫は河内国石川郡とされるが（一五一・一三三）、桴領と
して丹波・葛野井津間で活動した。⁽¹⁷⁾

足麻呂の本貫が河内国石川郡であつた理由はよくわか
らないが、葛野郡の秦調曰佐氏の一族であることはほぼ
まちがいないであろう。調行些麻呂も居住地は不明であ
るが、同族であろう。『新撰姓氏録』によると、調曰佐
は百済国人努理使主の後裔であり、百済系の曰佐集団で
あつたと推定できる。彼は『古事記』仁徳の磐之媛の説
話にも登場するが（表記は奴理能美）、そこにはその家
は筒木（綴喜）にあつたとされる。また、『新撰姓氏録』
において、努理使主の後裔とする氏族に水海連（河内国
諸蕃百済）、民首（右京諸蕃百済・山城国諸蕃百済）が
あり、近江国との関連を暗示する。次に述べるように、
近江国には大友民曰佐氏が分布した。

次に、紀伊郡に着目したい。前掲のように、『新撰姓
氏録』山城国諸蕃百済には木曰佐が記載され、末使主の

同祖で、津留牙使主の後裔とある。木曰佐の名は曰佐集団が後次的に紀氏の同族とされたことによるかもしれないが、佐伯有清の指摘するように、紀伊郡とのつながりを想定することが可能であろう。他に確証は得られないが、木曰佐氏は紀伊郡に居住したと考えておきたい。天平四年山背国愛宕郡郷里末詳計帳（一一五二三）¹⁸には戸主川造石弓の戸として上曰佐氏が見える。同氏が愛宕郡に居住したことは事実であるが、現存する同計帳のなかで四名のみであり、多くの曰佐氏が居住したわけではないと思われる。前掲のごとく、『新撰姓氏録』では上曰佐は河内国諸蕃百済に記載される。基本的には河内国に本拠をもつと考えるべきかと思われる。

近江国に比較的大きな曰佐集団が居住したことがわかる。前述のように、『新撰姓氏録』には野洲郡に曰佐が居住したことが記される。さらに、『続日本紀』延暦六（七七七）年七月一七日条にはつぎのような記載がある。

右京人正六位上大友村主広道・近江国野洲郡人正六位上大友民曰佐竜人・浅井郡人從六位上錦曰佐周興・蒲生郡人從八位上錦曰佐名吉・坂田郡人大初位下穴

太村主真広等 並改^二本姓^一賜^二志賀忌寸^一。

近江国野洲郡には大友民曰佐氏が居住し、そればかりでなく、浅井郡・蒲生郡にも曰佐氏の居住が確認できる。志賀忌寸はもともと大友村主、穴太村主および大友民・錦（錦部）の曰佐集団であったことがわかる。また、『日本後紀』延暦一八年三月六日条には、「近江國浅井郡人從七位下穴太村主真杖賜^二姓志賀忌寸^一」とある。浅井郡の穴太村主にも志賀忌寸が賜姓された。『新撰姓氏録』撰津国諸蕃漢では志賀忌寸は「出^レ自^二後漢孝献帝^一也」とされ、後漢孝献帝の後裔とされていた。

近江国の渡来人、特に東漢氏系の漢人について、山尾幸久・大橋信弥の研究が詳細である。¹⁹ それらを参考しながら、曰佐の分布を改めて確認しておきたい。

栗太郡

近江国栗太郡木川郷の大友曰佐棕麻呂（丹裏文書二五一九九）。長岡京出土木簡に「曰佐舟虫」の人名がみえるが、その前に氏の名として地名などがつくかどうかは不明である（『長岡京木簡』一九六号）。野畑遺跡は近江国庁関連遺跡または勢多

莊家と推定される遺跡であるが、「曰佐」と記された墨書土器が出土した。⁽²⁰⁾

滋賀郡

近江国滋賀郡錦部郷の大友曰佐田麻呂・真須良（二二二二〇）。地名からみて、穴太曰佐・錦部曰佐もそれぞれ滋賀郡内での居住が推定可能である。大友曰佐は同郡大友郷、錦部曰佐は錦部郷（『和名抄』の地名により、穴太は『和名抄』にはないが、同郡に穴太駅が存在した（『延喜式』兵部省）

野洲郡

上記の『新撰姓氏録』・志賀忌寸賜姓記事に加えて、西河原遺跡群出土木簡に野洲郡馬道郷における大友行氏の居住が確認できる。⁽²¹⁾

蒲生郡

志賀忌寸賜姓記事に錦部曰佐が見えるほか、近江国蒲生郡桐原郷に大友曰佐氏の存在が確認できる（二二七九）。

神崎郡

平城宮出土木簡に近江国甘作（神崎）郡雄諸郷に

大友行氏の居住したことが確認される（『平城宮木簡』三 三一九八号）

浅井郡

志賀忌寸賜姓記事に錦部曰佐氏が見える。

伊香郡

『和名抄』によると、遠佐郷があった。これは曰佐集団の居住から生まれた地名である可能性がある。る。

琵琶湖の東側を中心に広範に曰佐集団が分布したことがわかる。山尾幸久は志賀漢人と称された近江国南部の漢人について、穴太村主・穴太史・穴太・穴太野中史、大友村主・大友曰佐・大友・大友民曰佐・大友但波史族・大友桑原史、錦部村主・錦部曰佐、錦部、槻本村主、三津首、志賀史の姓を持つものであるとした。大橋信弥は山尾の見解を継承し、中心となる勢力を穴太村主、大友村主、錦部村主のグループとして、それに次ぐものとして、槻本村主・槻本連からなる槻本村主のグループと三津首のグループをあげる。山尾や大橋は村主姓を中心に曰佐・史などの姓も含めて、氏名の共通する氏をまとめ

て漢人集団と把握する。『坂上系図』の漢人の村主姓の氏族として西大友村主・錦部村主がみえ、大友・錦部村主は確実に漢人集団であるといえる。この点は問題ない。しかし、氏の名が共通する曰佐・史などを包含しうるかどうかは明確ではないではないか。この点について、山尾・大橋ともに、特に論証を加えてはいない。氏の名を同じくする点や同時に志賀忌寸を賜姓された点に着目して、そのように論じたのであろう。

『新撰姓氏録』の記載を確認してみると、村主姓の諸氏は次のように見える。

穴太村主

右京未定雑姓 志賀穴太村主 後漢孝献帝男美波夜

王之後也。

山城国未定雑姓 穴太村主 曹氏宝徳公之後也。

錦部村主

右京諸蕃漢 錦織村主 出自^二韓国人波怒

志^一也。

山城国諸蕃漢 錦部村主 錦織村主同祖。波能

志之後也。

穴太村主氏には志賀忌寸と同じく後漢孝献帝に出自を求めるものがあるが、もう一つ、「曹氏宝徳公」の後裔とするものがあり、錦部村主氏は「韓国人」とされる人物の後裔である。また、大友村主氏の記載は存在しないが、河内国未定雑姓大友史は「百濟国人白猪奈世之後也」とされ、大友村主氏も百濟国人の後裔とされた可能性がある。

後漢孝献帝に出自を求める志賀穴太村主氏はおそらく志賀忌寸を賜姓された穴太村主氏に近い存在であろう。『坂上系図』によると、七姓の漢人のうち、段姓の一族は高向村主・高向史・高向調使・評首・民使首の諸氏であり、『新撰姓氏録』では民使首は「宝徳公之後也」とある。穴太村主氏は東漢氏のなかでも七姓の漢人の後裔であった。錦部村主氏に後漢の皇帝の後裔とするものはない。これはおそらく錦部村主氏が志賀忌寸賜姓の対象とならなかったためであろう。つまり、志賀忌寸賜姓によって、後漢の皇帝につながる系譜が出現したのであり、それはおそらく東漢氏の祖阿知使主自身が漢に結びつけられた結果であろう。『統日本紀』延暦四（七八五）年

六月一〇日条の坂上荊田麻呂らの上表には「臣等本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後也」とあり、坂上系図では阿知使主は漢の高祖の後裔である。⁽²³⁾ 渡来説話によると、村主姓の氏は阿知使主の本郷の人民であり、阿知使主の一族ではない。したがって、村主姓の氏族が後漢孝献帝の後裔と称したのは後次的に形成された系譜になるはずである。韓国人あるいは百済人の後裔とする系譜がより古い段階での系譜であったと思われる。

いっぽう、日佐集団のなかでも、志賀忌寸賜姓の対象となった一族は後漢孝献帝の後裔とする系譜をもつに至ったはずであるが、これ以外は武内宿祢の後裔とする系譜および百済に出自を求める系譜を有したと思われる。

漢人と日佐集団を対象とする志賀忌寸賜姓は両者が近い関係にあったことをものがる。しかし、もとは同じく渡来人であるが、異なる系譜を有したと思われる。また、瑣末なことにように思えるが、漢人が志賀を本拠としたことは疑いのない事実であるが、『新撰姓氏録』によると、日佐集団は野洲郡を本拠としたように思われ

る。彼らの氏名もやはり滋賀郡の地名に基づき、村主姓の漢人と同一なのであるが、もとは居住地の違いがあったのではなからう。以上、近江国の日佐集団は志賀漢人の一部ととらえることはできないと考える。

北陸道の若狭・越前国でも日佐集団を確認することができる。

越前国敦賀郡伊部郷―秦曰佐 神護景雲元(七六七)年二月一日越前国司解(五一六一)

若狭国三方郡耳里―秦曰佐 『平城宮発掘調査出土木簡概報』一九 二二ページ下

若狭国遠敷郡遠敷郷―秦曰佐 『平城宮発掘調査出土木簡概報』三三 一三ページ下

秦曰佐氏は『新撰姓氏録』にはないが、秦氏と同族関係にある日佐集団であることが注目される。

四 日佐集団の編成

基本的に日佐集団は欽明期に整備されたと考えるべきである。すでに、掲出した史料ばかりであるが、百済系の日佐集団に関わると思われる『新撰姓氏録』山城国皇

別曰佐には欽明期の渡来の記述があり、それに対応するのが『日本書紀』欽明元（五四〇）年二月条の百済人の渡来記事である。さらに、『日本書紀』同二六年五月条の高麗人の渡来記事も曰佐集団と関わりを持つと考えられる。主に欽明期に渡来した人物を中心に、ほぼ同じ時期に三か国の曰佐集団を編成したと考えるのが妥当であろう。そして、いうまでもなく、当該期は対外関係における大きな画期であった。高句麗の圧迫により五三八年に都を熊津から泗泚に遷した百済が、南進を始め、大伽耶連合と衝突し、さらに新羅も伽耶南部に侵攻を開始した。その結果、五六二年に大伽耶が新羅に併吞された。これが『日本書紀』では任那滅亡とされるできごとである。また、この前後に難波津において館・大郡・小郡といった施設が整備された。²⁴ 曰佐集団の設置がこのような対外関係における制度的整備の一環であったことは容易に推定することが可能である。

山尾幸久は漢人の近江国移住について、六世紀後半に高句麗との国交がはじまり、敦賀津など日本海側と泉津を結ぶ国家的な交通・通信路が設定され、それを守るた

めであったと推定する。本稿は漢人を主な対象とするものではないので、漢人の問題は保留したいが、山尾の指摘する交通路が曰佐集団と密接につながったであろうことは注目される。曰佐集団の主要な居住地を概観すると、大和から、山城（紀伊郡あるいは愛宕郡）、近江国南東部、若狭・越前と、北陸地方へつながる一つのルートを示唆する。特に大和と北陸地方を結ぶ交通路との結びつきは明確であり、それが山尾の指摘のように、主として高句麗との交渉において重要な意義を有したことはまちがいない。

大和国添上郡の曰佐集団は都にもっとも近接し、曰佐集団の中核的な存在であったと考えられるが、欽明天皇―磯城島金刺宮、敏達―訳語田幸玉宮、用明天皇―磐余池辺双槻宮と天皇の宮に必ずしも近いとはいえず、なぜこの付近に居住したのかやや不審でもある。また、管見の限りでは、難波地域における曰佐集団の存在は希薄であり、彼らが難波地域で活発な活動を行ったとは思えない。なぜ、難波や瀬戸内海沿岸ではなく、北陸地方への交通路と対応するかたちで曰佐集団が配置されたか

は、現在のところ、明確な答えを持ってないでいる。曰佐集団の分布についてこのような課題もあり、今後、考えていきたい。

さて、曰佐集団の居住地は秦氏のそれと重なるケースが多いことが特徴的である。⁽²⁵⁾山背国の葛野郡と紀伊郡が秦氏の有力な拠点であることは、改めていうまでもない。葛野大堰は秦氏の造営した施設として著名であり、太秦の地名は秦氏の本拠地であつたことに由来する。『日本書紀』欽明即位前紀には欽明の若き日にできごととして、「山背国紀伊郡深草里」に居住した秦大津父にまつわる説話が収録される。また、愛宕郡の曰佐氏はそれほど有力な集団ではなかつたようであるが、同郡と秦氏の結びつきは、岸俊男の研究（注18論文）によって詳細に示された。それによると、郷里未詳計帳の戸主の氏名のなかに秦人広幡・秦倉人・秦氏がみえ、また、紀伊郡の深草と葛野郡の太秦に関連すると思われる秦氏やその他の氏族の名も見え、秦氏やその同族が愛宕郡内へ浸透し、定着していたという。

近江国ではおそらく滋賀郡や野洲郡を中心に、栗太郡、

蒲生郡、神崎郡、浅井郡、伊香郡など、湖東・湖北地方を中心に曰佐集団が分布するが、秦氏のなかで愛智郡を本拠とする依智秦氏は長期間にわたって主要な郡司をほぼ独占した、近江国のなかでも有力な氏族であつた。また、若狭国では、遠敷郡を中心に秦人・秦勝氏が居住したことがわかる。同郡には秦を氏名にもつ曰佐氏（秦曰佐氏）が居住した。越前国でも坂井郡・足羽郡・大野郡・丹生郡・敦賀郡に秦・秦井手・秦人部・秦下氏が居住したことが確認できる。

さらに、播磨国でも新羅系の曰佐集団である己知氏と秦氏の関係は密接である。播磨国には飾磨郡巨智郷があり、『播磨国風土記』には次のような説話がある。

右 巨智等 始屋^二居此村^一 故因為^レ名。所^三以云^二草上^一者 韓人山村等上祖柞巨智賀那 請^二此地^一而墾^レ田之時 有^二一聚草^一 其根尤臭 故号^二草上^一

巨智里の名称は巨智が居住したことに由来し、それは具体的には韓人山村らの上祖の柞巨智賀那であつた。「韓人山村」とは、そのままの個人名ではなく、韓人である

山村の意味で、山村己知氏のことであろう。杵巨智賀那は杵己知氏の一族であろう。したがって、大和添上郡の己知がこの地に移住したことはほまちがいないだろう。また、調庸墨書銘には己智郷の「己智田主」の人名が見える。⁽²⁶⁾ 播磨国では赤穂郡に秦氏の大きな分布があるが、賀茂・飾磨・揖保郡にも存在する。飾磨郡では秦（因達郷）が確認でき、揖保郡では秦田村君・少宅秦公（小宅郷）が確認できる。ここでも曰佐集団と秦氏の分布が重なる。

なお、平野邦雄（注8論文）は秦田村君有磯を杵己知蟻羽と同一人物として、秦氏と己知の関係を論じたが、大平聡⁽²⁷⁾の批判があり、両者が別人であったことが明白である。

さらに、秦を氏名にもつ曰佐集団も存在した。これもあり返しになるが、山背国葛野郡の秦調曰佐氏や若狭国三方郡・遠敷郡および越前国敦賀郡秦曰佐氏である。彼らは擬制的であったかもしれないが、秦氏の同族であった。

このような曰佐集団の分布状況から、曰佐集団の設置

やその業務の執行が秦氏と密接に関わりながら行われたのではないかとの推測が可能になる。秦氏は、技術に優れた、在地的な豪族と評されることが多いが、このような中央政府の外交機能の一端を担っていただのである。⁽²⁸⁾

さらに、曰佐集団が本来的な通訳の役割とともに交通や流通の活動にも従事したらしいことが注目される。まず、調曰佐足麻呂は山背国の葛野大堰周辺で材木の運送に従事していた。おそらく彼に血縁的にも近いと思われるのが調曰佐皆万呂である。皆万呂は東大寺写経所に勤務したが、天平宝字六（七六二）年二月には二部大般若経書写⁽²⁹⁾にあたり、財源としての調綿を受け取り売却し、また、売却時の使となった。⁽³⁰⁾ この書写事業は当時の流通経済の実態を示す史料として著名である。多くの人物が調綿の売却を行ったが、彼らは基本的にそれぞれの流通経済とのつながりを利用して売却を行ったとされる。曰佐真月は石山寺造営時のいわゆる雑様手実の一点である天平宝字六年八月九日解（五二二六）に名がみえ、勢多から宇治までの石山寺造営の残材回漕を請け負った。この文書の署名者は真月のほか、土師石国・民

鑑麻呂・但波清成であり、彼らが集団で残材回漕を請け負ったのである。曰佐真月は瀬田・宇治川の水運に関わりを持つ人物と考えられる。居住地は不明であるが、近江国の石山寺周辺、あるいは山背国紀伊郡がもつとも蓋然性が強いであろうと思われるが、確定はできない。長距離交易に従事した人物として著名な檜磐島（『日本霊異記』中二四話）も問題となるが、今後、検討してみたい。

彼らの八世紀中葉の活動がどの程度、もともとの曰佐集団の職務に由来するかは不明であるが、曰佐集団の職務を広く外国使節との交渉全般ととらえると、後世における交通との関連は不自然なことではない。

おわりに

以上、曰佐集団の基本的なあり方を説明すべく、論を進めてきた。結論を要約すると、次の通りである。

- (1) 曰佐集団は百済系・新羅系・高句麗系の出自をもつ三つの集団からなり、朝鮮三国それぞれとの間で通訳の職務を果たしたと考えられる。大和では檜・山

村に集住し、同じ氏の名（檜曰佐・山村曰佐）をもっていた

- (2) 曰佐集団のうち、新羅系の集団は曰佐の姓を持ったが、己知の尊称を付して呼ばれたと思われる。

- (3) 曰佐集団の主な居住地は大和国添上郡（山村郷・檜中郷）や山背国葛野郡・紀伊郡、近江国東部、若狭・越前国などであり、日本海側と大和を結ぶ交通路にそって配置されたと考えられる。一方、難波や瀬戸内海沿岸地域にはあまり分布しなかったようである。

- (4) 曰佐集団は欽明期に整備されたと考える。それはいわゆる任那滅亡（新羅による伽耶地域の併呑）に象徴される、対外関係の激動を背景とする外交に関わる制度的整備の一環であった。

- (5) 曰佐集団の分布と秦氏の分布は重なり、秦を氏の名に持つ曰佐が存在するなど、曰佐集団は秦氏の支配下にあり、職務の執行は秦氏と密接に関わりながら行われたと思われる。

- (6) 曰佐集団は本来的な通訳の役割とともに交通や流通

の活動にも従事したらしい。この点は奈良時代の曰佐姓の人物の活動から推定される。

以上である。

曰佐集団の活動の内容はもとより、対外関係における北陸地方の意義や秦氏との関係の具体相など、さらに問題とすべき点が多いが、曰佐に関わる基礎的な論点は提示できたのではないかと考える。諸課題については今後に期したい。

注

- (1) 『大日本古文书(編年文書)』一五卷一三三ページの意。
以下、正倉院文書の出典表記はこれによる。
- (2) 磐麻呂は天平二〇年上日帳では調曰佐磐万呂(一〇一三五六)、勝宝元年上日帳・二年上日帳では調行磐麻呂(三一二九三、四五一一)。大名は天平二〇年上日帳では錦部曰佐大名(一〇一三六七)、天平勝宝元年上日帳・二年上日帳・四年上日帳では錦部行大名(三一二八五・四二九・一一一三六五)。
- (3) 遠山美都男「日本古代の訳語と通事」(『歴史評論』五七四 一九九八年)、崎村弘文「古代語ヲサ(長・通訳)をめぐって」(『国語国文薩摩路』五四二〇一〇年)など
- (4) 太田『日本上代社会組織の研究』(邦光書房 一九五五年) 四編二二章三節・佐伯『新撰姓氏録の研究』以下、両氏の見解はすべてこれらによる。
- (5) 堀池「佐井寺僧道葉墓誌について」(同『南都仏教史の研究下諸寺編』(法蔵館 一九八二年) 初出一九六一年)
- (6) 白井「大和国添上郡樺本村の高良神社と長寺」(『皇学館論叢』三四一二 二〇〇一年)
- (7) 藤井「古代大和国添上郡の郡司氏族」(『史泉』九九二〇〇四年)
- (8) 平野邦雄「秦氏の研究」(『史学雑誌』七〇一三・四一九六一年)
- (9) なお、『続日本後紀』承和一〇(八四三)年二月一日条では奈良己智氏の先祖を百済国人とするが、これは『日本書紀』の記事に由来するものであらうと推測する。
- (10) 『新撰姓氏録』(右京諸蕃高麗)によると、長背連は高麗国主鄒牟(朱蒙)の後裔で、欽明期に渡来し、体格により長背王の名を与えられた。欽明期に渡来した高句麗系の集団であるが、これが上記の高麗人と同じかどうかは不明である。
- (11) 太田亮は奈良は大地名で、山村はそのなかの小地名とするが、これは誤りである。

(12) 白井注6論文

(13) 『大日本古文書〈家わけ一八東大寺文書三〉東南院文書三』の六三二(三)号文書の意。以下、東南院文書の出典表記はこれによる。

(14) 再編の時期を厳密に指摘することはできないが、郷里制の廃止後まもなくであったことは確実で、それと関連する可能性が強いと思われる。この問題はさらに考えてみたい。

(15) 和田「遷都以前」(直木孝次郎編『古代を考える奈良』吉川弘文館 一九八五年)

(16) 『日本書紀』垂仁二五年三月一〇日条には、大倭大神を穴磯邑に神地を定め、大市長岡岬に祀ったとする説話がある。長岡岬の場所を明確に示すことはできないが、大市は箸墓の周辺と推定される。三輪山周辺の東側の丘陵をある程度広く長岡と呼んだ可能性があり、それが岡曰佐や長岡忌寸の名の由来であった可能性がある。

(17) 調曰佐足麻呂の活動などについて、鷲森「凡そ事の参差に多く詐事あり」(『日本文化史研究』四七二〇一六年)で論じた。

(18) 岸俊男「山背国愛宕郡考」(同『日本古代文物の研究』〈塙書房 一九八八年〉初出一九七八年)は錦部郷あるいは栗田郷と推測する。また、当該論文が愛宕郡に関する基本的な研究である。

(19) 山尾「近江大津宮と志賀漢人」(『東アジアの古代文化』七六一九九三年)。以下、同氏の見解はすべてこの論文による。大橋「近江における渡来氏族の研究」(同『古代豪族と渡来人』〈吉川弘文館 二〇〇四年〉初出一九九五年)・「大友曰佐と安吉勝氏」(同書 初出一九九八年)。

(20) 浜修「古代遺跡と出土文字資料」(『滋賀県文化財保護協会紀要』九 一九九六年)

(21) 『木簡研究』三三三・『日本古代木簡選』

(22) 『日本書紀』推古一六(六〇八)年九月一日条に「志賀漢人慧隠」とあり、この段階で志賀漢人の名称が存在したと思われる。

(23) 『続日本後紀』承和四(八三七)年二月一七日条(永野忌寸、承和四年三月五日条(槻本連)、承和四年二月四日条(志賀史・錦部村主・大友村主)によると、この頃には漢献帝の後裔とされた多くの漢人が確認できる。後漢の皇帝に結びつけられた系譜が拡大を続けた様相がうかがえる。

(24) 鷲森「難波と大和王権」(『続日本紀研究』四一二二〇一四年 実際の刊行は二〇一六年)において、難波の状況について論じた。

(25) 以下、秦氏の分布などについて、加藤謙吉「秦氏とその民」(白水社 一九九八年)を参照した。

(26) 『正倉院宝物銘文集』調庸関係銘文 九四号

(27) 大平『三人』の写経生」(『桐朋学園大学研究紀要』

一三 一九八七年)

(28) 『日本書紀』垂仁三年三月条にある天日槍説話は、最

初、播磨に停泊した天日槍が諸国の歴視を思い立ち、
菟道河をさかのぼり、近江国吾名邑にしばらく住み、
若狭国を経て但馬国に至り定住したとするものである。
この説話と秦氏の関係についてすでに指摘があるが、
曰佐(己知)とも深い連関があるように思われる。

(29) この書写事業に関する近年の研究として市川理恵「二

部大般若経写経事業の財政その運用」(『ヒストリア』

二二六 二〇一一年)

(30) 売却用の綿一二〇屯を受け取り(売料綿下帳

一六一七四・七五、雑物収納并下用帳 一六一九〇)、

使となった事例が二例あり(売料綿并用度銭下帳

一六一七九・八一)、また、交易綿を購入した事例も

ある(同 一六一八〇)